

平成 27 年度新農薬実用化試験で注目された 病虫害防除薬剤

一般社団法人日本植物防疫協会 調査企画部 かどた けんご ほうじょう ひろし
門田 健吾・北條 広

平成 27 年度の新農薬実用化試験については、10 月 15 日の茶分野を皮切りに 12 月 22 日の家庭園芸分野まで、分野ごとに 16 の成績検討会を開催し、依頼された薬剤の各種病虫害に対する効果・薬害、使用方法の検討を行った。

ここでは、平成 27 年度試験の概要ならびに、注目された薬剤等について紹介する。

なお、本稿で「新規化合物」と記載しているのは、平成 27 年 1 月に依頼された時点で未登録の有効成分を示す。

I 新農薬実用化試験の概要

[殺菌剤]

本年度依頼された試験薬剤は 231 剤であった（生物農薬を含む）。これら薬剤についてそれぞれ複数の作物、病害に対して延べ 2,478 件の試験が実施された。成分が新規化合物単剤もしくは新規化合物同士の混合剤である製剤は 31 剤、新規化合物と既知化合物の混合剤は 17 剤であった（図-1）。

試験分野別に見ると、稲・麦関係では、昨年に比べ試験数は減少した。水稻の病害別ではいもち病の試験が最も多かったものの、その数は昨年と比較して大きく減少した。その他病害は前年と同程度であった。麦関係では雪腐病・黒節病の試験数が多かった。本年度初めて依頼された新規化合物を含む製剤は 1 剤で、茎葉散布剤であった。稲病害の試験では、抵抗性誘導剤の試験数が 4 割を占めた。

野菜関係については、昨年に比べ試験数は増加した。本年度初めて依頼された新規化合物を含む製剤は 7 剤で、野菜類のうどんこ病・灰色かび病・菌核病を中心に試験が行われた。病害別では、ナスうどんこ病、キク白さび病の試験が多かった。前年と比較して、イチゴ灰色かび病、トマトうどんこ病の試験数が減少した。

果樹関係では、落葉果樹の試験数が昨年より増加したが、常緑果樹では昨年より減少した。寒冷地果樹の試験数は昨年と同程度であった。本年度初めて依頼された新

規化合物を含む製剤は、落葉果樹、寒冷地果樹でそれぞれ 4 剤、常緑果樹で 2 剤であった。病害別では、落葉果樹でなし黒星病、もも灰星病、ぶどう灰色かび病、うめ黒星病の試験が多かった。常緑果樹ではかんきつ黒点病、キウイフルーツかいよう病の試験が多く、昨年多かったかんきつかいよう病・灰色かび病の試験が減少した。寒冷地果樹では、りんご斑点落葉病・すす点病・すす斑病の試験が多く、昨年多かったうどんこ病は減少した。

野菜・果樹関係では、ここ数年依頼が増加しているコハク酸脱水素酵素阻害剤（SDHI）の試験が多く、混合剤を含め野菜、果樹病害の試験数の約 3 割がこのグループの薬剤であった。

茶分野では試験薬剤 11 剤で試験数は昨年と同程度であった。本年度初めて依頼された新規化合物を含む製剤は 2 剤であった。病害別では炭疽病の試験が最も多かった。

芝草分野では試験薬剤 24 剤で試験数は昨年度に比較

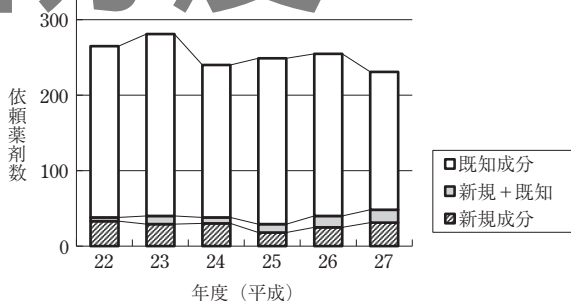


図-1 殺菌剤効果試験依頼薬剤数の推移

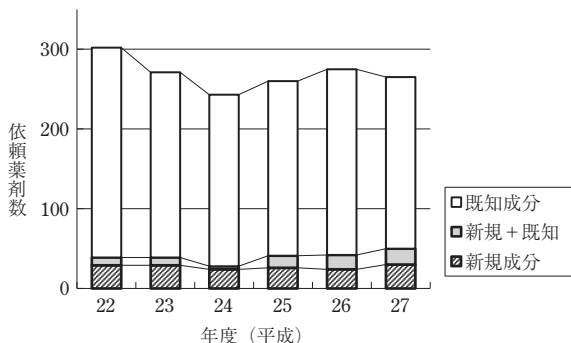


図-2 殺虫剤効果試験依頼薬剤数の推移

The Remarked Pesticides for the Efficacy Study in Japan (2015).
By Kengo KADOTA and Hiroshi HOJO

(キーワード: 殺虫剤, 殺菌剤, JPPA, 新農薬実用化試験, 平成 27 年度)